

一生参学の大事ここにおわりぬ

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依つて、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり

この偈は、まず「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依つて」で一旦切れます。この世親によって、一心帰命ということが出てくるわけですが、この偈も、世親は「大乘修多羅真実功德」によって一心に帰命したと、こういうことになっていますね。

「行巻」を見てみると『浄土論』を引いてあります。ところが、そこで親鸞はどうやって言っているかといいますと、まず「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」を引いてある。これで「世尊我一心」を略している。そして、もう一つ引いてあります。「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」を引いたのですね。「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」から「乃至」を入れずに直接引いてある。これは、略してあるのだから「乃至」ということが入るはずでしょう。ところが「観仏本願力」、そこに結びつけてある。

これはどういう意味かというと「行巻」でも実際言うのと、この「真実功德相」、これが大事なのだということです。修多羅ということもあるけれども、親鸞は「真実功德」ということが必要だった。それで「真実功德を」「能令速満足 功德大宝海」という。ですから結びつけてこれを入れるわけですね。これでひとつの文章になってしまふ。それで「乃

至」も入れていないわけです。

そうすると、真実功德というのとは何かというと、浄土の功德です。真実功德というのは二十九種莊嚴功德のことを真実功德という。真実功德が浄土なのです。これも面白いことだね。浄土にどこか行くというものではない。真実功德に満足するということを浄土という。真実功德というのは本願の功德に満足する。本願が我々の全身全霊に満ちあふれる、満たされると。それが浄土というものなのだ。それが浄土往生というものです。真実功德が浄土だという、それが浄土の「かたち」なのです。

しかし同時に親鸞は、真実功德は名号だと言う。これも「行巻」に引いてある。真実功德が浄土だけなら、「真仏土巻」に引けばいいでしょう。しかし「行巻」に引くというのは真実功德が名号だからなのです。つまり真実功德は『浄土論』から見れば浄土であるし、親鸞から見れば名号ですね。ちよつと解釈が違うようだけれども、それはひとつなのだ。浄土の功德が、そのまま、真実功德がそのまま南無阿弥陀仏なのだ。つまりこれは、内容が同じだけれども捉え方が違う。

真実功德が浄土としてあらわされる場合には、莊嚴というのです。真実功德をもって莊嚴された世界です。名号といたった場合には回向されているというのです。回向ということがあって初めて浄土だと。念仏と浄土の関係はそうです。浄土の場合は莊嚴というのです。念仏の場合は回向という。浄土を回向すると。つまり我々はどこで浄土に触れるかという、念仏するところで浄土に触れる。念仏するところです。つまり、そういうところを見なくてはいい。浄土はどこにあるかという、名号というところにある。南無阿弥陀仏というところに浄土はある。南無阿弥陀仏の向こうの方にあるのではない。南無阿弥陀仏のところに浄土はある。

そうすると、今度は「いつ」あるのかということが言われなくてはならない。真実功德に満たされる、浄土のところに満たされるのは、南無阿弥陀仏で満たされる。南無阿弥陀仏で。いつ満たされるかというと、信の一念で

満たされる。信じる「時」に満たされる。信じる「時」だね。そして「どこで」ということになる、「念仏」なのです。念仏で浄土に触れる。信じる「時」に浄土に触れる。そういうことです。そういうことがはつきりしなくてはいけないですね。混乱せずにはつきりしなくてはならない。

それで今言ったように、そこに「乃至」とあればそこで切れるのですが、しかし「乃至」を入れないので切れないのだということです。真実功德はすぐに「能令速満足 功德大宝海」となる。それは面白いところですね。本願に遇う「時」、本願の世界に触れる時に、浄土の功德莊嚴全体を満足するのだ。それもだんだん満足するというのではない。本願に目覚めた「時」が満足する「時」だ。それでこの「速」というのがある。「能令速」の「速」ですね。このような大事な結合をしているのです。そこを「乃至」という字を置かず、文章が続いているのだと、こういう引き方ですね。

だから、今度は『入出二門偈』では、この大事な言葉を一番初めに持ってきている。『入出二門偈』のこの作り方は、「行巻」の引文の仕方と同じでしょう。「真仏土巻」の引文は「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来願生安樂国」のあと「乃至」を置かずに「觀彼世界相勝過三界道究竟如虚空广大無辺際」をすぐ引いてある。そして、「行巻」は「我依修多羅」からすぐ「觀仏本願力」に結び連なる。まあそういうことはいろいろあるけれども、今さしあたり、この『入出二門偈』というものの文章の構造には、『教行信証』の『浄土論』の引き方が、ちゃんと背景にあっている。

では「行巻」はそうだったが「信巻」はどうなるかという、これがおもしろい。「信巻」が一番大事なところだからね。「世尊我一心」と。浄土の一心だから。一心三心だから。『浄土論』というものを非常に大事に取り扱われているのが「信巻」なのだ。ところが「行巻」では引いてないのですよ。一番大事なところを引文してないのはどういうことかという、親鸞の言葉になっている。だから引文というものは間接のものではない。親鸞自身の言葉とし

て「一心」が取り扱われている。

そして、この入出二門の行、これが「行巻」に引いてある。これはつまり、やはり「行巻」の行ですからね。この入出二門のところで、ここに行ということが出てくる。入出二門の行ですね。自利利他の行ですね。そういうことがあるので、これが「行巻」に引かれたのだ。つまりいつてみればそれは何故かと言うと、名号が行だからなのだ。そういうことは本願で言える。本願をやめたら名号は名号、行は行。何も関係がない。名前は名前ですね。仏さまの名前が行だというようなことは、本願に立つて言えることであって、本願を取ってしまえば、名前は名前、行は行です。阿弥陀仏の本願というものはどういうものかというところ、念仏を選択してそれをもって本願としている。念仏を選んで、そしてその選ばれた念仏によって本願をたてる。それで念仏往生の願というのです。念仏往生の行とするのだ。名号は本願の行だ。我々のやる行ではないのです。これを超世の本願というのですね。だから、行という意味が全然違うのです。仏の名をもって、本願が行ずる。はたらくのです。つまり、仏があつてそれに名をつけたのではないのです。ね。仏の名が仏自身なのだ。仏の名が仏さまなのだ。仏さまがあつてそれに名をつけたのではない。仏の名が、仏自身だ。そしてはたらくのだ。それをただ声だと思っているから何にもならないのですね。やっぱり仏の名によって、そこで声を聞いた。聞いたときに初めて名が行だとふれたのであつてですね、普通はそうは思わないでしょう。名が行、それが本願の不思議というのだ。その一点にあるのです。

四十八願の精神というものは、名をもって行とする。名をもって本願とする。だからして、その意味で、あえて捉えた念仏を発願回向する必要があると言います。念仏以外の行なら発願回向しようとするのです。発願回向によって往生の行となる。念仏だけは発願回向を必要としない。なぜならそれ自身が発願回向だからです。本来、それが如来の発願回向の行だから、我々の発願回向を必要としない。こういう意味なのです。だから念仏というものは、いろいろな行の一つではない。他の行とは質が違う。体質が違うのだ。こういうことを言うのです。つまり、本願自身

が、衆生往生の道となったのだ。我々は今まで知らずに大地を踏みつけていた。自分の思いで踏んでいたのですね。ところがそうではない。踏まれていたのは本願である。それで我々はその踏んだ道によって運ばれたのだ。我々が知らずに踏んでいたものが、実は本願が我々を背負って立ってしてくれた、それが自覚というものです。そういうところにもつたないというものがある。

善導大師は、その恩徳というものを「慚愧すべし」とおっしゃっていますね。

敬いて一切往生の知識等に白さく、大きに須らく慚愧すべし。釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり、種種の方便をもつて我等が無上の信心を發起せしめたまえり。

こう言っておられる。慚愧というのはそういう意味です。法蔵菩薩というものを、何でもない人だと思っていたのだ。穢土にいる間は気がつかなかった。つまり法蔵菩薩というものは、教信沙弥みたいな人だった。全く凡夫になっているから分からなかった。それを法蔵菩薩という。こういうことです。だからそこに名が行ということがあった。その行というものをあらわすのに五念門の入出二門をもつてしてある。

では、そこにどういうことが出てくるのか。こういうと、『浄土論』に出てくるのは如実修行ということです。「行巻」では大行とっていますが、『浄土論』を通してみると、大行というものは如実の修行です。如実というのは努力してという意味ではない。努力して修行するのではない。如実の修行なのだ。真如一実の行なのだ。こういうことです。つまり真如の行だということです。人間の努力でやる行ではない。真如一実の行、真理がはたらくのだという。我々の努力でやるというのではない。それで如実修行というのだ。そこが大事なところですよ。

我々は、行といっているけれども、行というのは如実修行ということを深く考えなくてはならない。そして、如実修行ということがどこにあるかということを考えなくてはならない。だから何か今でも修練とか鍛錬とか言いますが、あれは如実修行でも何でもない。努力ということです。これまで浄土真宗の人は信が分からなかった。それは、何故分

からないかという、行が分からなかったからだ。行は何かというと、他力回向だ。こういうと、何もしないことだと思っている。何もしないことが行だと思っている。その人が何もしないのが行ではない。そこで今度は気がついてみると、行がないわけです。そこで今度は修練してやるということになる。そうすると自力の行に戻ってしまう。行というものは何かよく分からなかったのだ。努力することが行だと思っていたから、如実修行というものを考えたことがなかった。如実修行というの不行にして行ずるということです。不行にして行ずる。だからして行じたということが残らない。行じたままが不行だという。わしはやったぞというような意識が残らないということです。意識がちょっとでも入ったならば行にならないのです。意識というものがちょっとでも交わったならば行にならないのです。だからしてその如実修行というものになつていかなければならない。

そうすると、如実修行になるということは、どうなることかという、我々は如実修行にうなずくのです。うなずくということが我々の問題だ。それを一心ということです。如実修行だからと、それをまねするならば、如実修行したことになるが、如実修行というものは真似をする余地もないのですね。真似なんか出来ないのが如実修行というのだ。では何もしないのかというと、そうではない。うなずくということです。我々に残されているのは、如実修行に眼を開けということなのです。しなくてもいいのだという意味ではない。この本願に目覚めれば、そこに本願が如実修行となる。目覚めないならば、何もない。そのためにここに一心というものが言われている。我々にとって必要なのは、如実修行を一心として受けることです。一心によって如実修行相應するのだ。そうすると、相應ということが生きてくるかも知れないですね。

第二行の「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」の「相應」、あれがつまり如実修行相應です。一心が相應するのだ。それによって、如実修行に相應することが出来る。こういうようなわけがある。

少し複雑だったかも知れませんが、よく考えてみるとなかなか緻密なものなのです。親鸞の文章の引き方は精密を

極めている。よくこんなところまで読んだというくらい精密を極めている。いいかげんなことで読んでいないのです。どんな深い文章でも、ずさんな頭で読めばずさんになってしまふ。だからなかなか読めないのです。読んでいても、いいかげんな程度で済ますならば、上の方をすーっと辿っていった程度になってしまふのです。

今日は「行巻」の引文のことを話していますが、問題は親鸞がどこでそういうことを考え出したかということです。前に「観彼世界相」ということがどこから出てきたかという質問をしましたね。「観彼世界相」ということがひよつと出てきているけれども、それはどこから出てきたことなのかということを押さえなくてはならない。つまり、実は一心に帰命したときに、帰命した本願が光となって私を摂取した。摂取不捨です。そういう意味で言えば、摂取不捨とはどういうことかという、終わつたということなのです。信仰の利益です。しかし信心の利益は、信心を得て、そして信心の外に利益があるのではないのです。信心の中に利益があるのです。それを摂取不捨と言うのです。身体が丈夫になったとか、外に利益があるのではないのです。信心の外にその信心の利益を求めるのは、それは現世利益というものです。現世利益ではなくて、信心の中に本当の利益はある。信心を得て、それから何かの利益を受けるのではなくて、信心を「得た」ということが最高の利益なのだ。だからそれは、信心が信心に満足することなのです。信心を得て往生しないと満足しないという意味ではないのです。むしろ信心に目覚めて、往生はいらないのです。往生を得なくても後悔はしないのです。信心を得た上でもう一つ往生して、そんな欲の深いことはいらないのです。そういうことを摂取不捨というのです。

そう言ってみれば、「観彼世界相」で話は済んでいるでしょう。ちょうど『観経』に韋提希夫人が華座観で、廓然大悟して無生法忍を得たとあります。廓然大悟して無生法忍を得たということは、『観経』の一番最後の得益分というところで書いてある。しかし、昔から問題になっているのは、どこで無生法忍を得たのかということです。それが分からない。そこにはやはり見解の相違があった。しかしその問題は無生法忍を得たことがない人では、決めようが

ないのです。無生法忍を得たことのない人では決まりませんね。だから善導以外の人は、『観経』の教えを聞いて、最後に五百人の侍女と共に信心歓喜無生法忍を得た、こういうふうに言うのです。善導大師はそういうことを言わない。そうではない、それは華座観なのだ。華座観というところに、善導は無生法忍を得たとみる。あそこをよく見てみよと。『観』の中に「見」が出ているだろう。「見」というものがそれが無生法忍です。「見」というのは見たという意味ではない。「あらわれた」という意味なのです。「見」という字が「観」の中にある。「見」というのはこれは「あらわれた」という意味です。見たというけれどもそうではない。つまり、仏を人間が見たということはありはしないのです。だからして、仏を拝んだということは別に言えば、仏を拝むような仏の眼をいただいたということなのです。仏の眼を賜れば穢土に居ても仏でしょう。仏の世界に行っても目が開かなければそれは穢土である。だからして見るということが非常に大事なのです。そういうような意味で、『観経』の華座観の説法を聞いたときに、方便の教えをこえたのです。韋提希も救われたのです。『観経』のどこで救われたかというと、華座観で救われた。あそこ

に韋提希夫人は信の一念を起こした。そういうことです。では、あとの説法は何かというと、あとは全部これは未来世の衆生のために説かれたのです。自分はもう必要ない。未来世の衆生のために方便の教えを説いて下さいと。それで『観経』の流通分の説法まで続くのです。韋提希夫人自身はもういらないのです。見たところにすでに、「一生参学の大事ここにおわれり」というような意味が明らかになるのです。曠劫已来迷ってきたのは今日のためであったかと。初めていろいろさまよってきた意味が分かったと。こういうようなのがつまり一生の大事が終わったという意味なのです。その場所が華座観なのです。それが天親菩薩では「世尊我一心」という表白です。ここに天親の一生の大事が終わっているのです。「世尊、一心帰命願生安樂国」と。こういうふうに天親菩薩の一生参学の大事が、ちょうど韋提希夫人の無生忍を得たと同じように終わったのです。ではあとはどうするのか。つまりそこで「観彼世界相」と言う。

この「観」は、『観経』の「観」とは違う。『観無量寿経』の「観」は、未来世の衆生のためにというのですから、『観経』の「観」は、観念。だから観想。『観経』の「観」は観想という意味なのです。観見というのが、今言ったように華座観に出てくる。これは「観」を破ったのだ。観見ということのために観想を説いたのです。未来世の衆生と書いてあるが、未来世の衆生というのは、未だ本願に眼を開くことの出来ない衆生のためにということです。つまりそうすることは出来るけれど、衆生にはそれ以上は出来ない。そうすることとは想い浮かべることです。想いで本願を想い浮かべることですね。そうすると「見」ということは想いを破ることです。想いを破ること。ずいぶん違いますね。観想の方は感情だ。観見の方は智慧なのです。見は智慧なのです。観想は感情でしょう。ありがたいというのは感情なのだ。観想はそういう程度です。人間は観想で救われるものではない。

ところが『浄土論』のは観想ではない。そこで同じ観といっても違うのです。曇鸞は『浄土論』を解釈しておられるけれども、曇鸞ではまだ観見も観想も区別がないのです。曇鸞大師の『論註』のなかでは、まだ教学がやっぱり磨かれていないのです。だからして私は『教行信証』をして第二の『論註』だと言う。『論註』で全部言っているのなら『教行信証』は要らないのです。親鸞は第二の『論註』を作ろうとした。第二のと言ったのは、第一の『論註』ではまだ妥協性があるのです。『浄土論』に妥協はないけれども、『論註』の解釈に妥協がある。観想と観見の区別がついていない。信仰批判というものが出来ていないのです。まだ人間の感情に妥協しているのです。

天親菩薩も、言ってみれば、無生法忍というようなものは、これは第一行で終わっているのです。改めて観ということを出さなければ何であるか、これはつまり内観でしょう。浄土を想い浮かべるのではない。内観するのだ。浄土を通して本願を内観する。浄土を通して、つまり、信心の前景を通して背景を見るのです。直接に背景を見るわけにはいかないから、『浄土論』の浄土という前景を通して、浄土の、一心の背景を見る。それを内観ということです。外観するのではない。内観である。一心が一心自身を内観してくる。だからして、一応、信心として一心が終わって

いるのです。先ほど言ったように「世尊我一心」と、一心ということで終わりましたね。世親の長い間の求道生活がそこで目的を達成した。聖道門では成仏で目的を達成する。だから信心では目的を達成できないと考えるけれども、そうではない。本願から言えば信心というのが目的なのだ。聖道門から言うとか成仏が目的だ。本願から言うとか信心が目的だ。信心というものが確立してみると、今度は信心というものを通して、今度はそこに、信の依ってきたところ、由来するところを内観する。その由来するのを願うのです。何か信で終わったようだけれども、実は信から願が始まってくる。一生の大事はここで終わったのだ、というところから、終わりというところから本当の意味での始まりが出てくる。信心を得たからといって信心に腰を落ちつけるのではない。信心に立ち上がるのです。かえってそこで立ち上がる。こういう世界を、この「観彼世界相」という一句は展開するのですね。つまりいってみれば一心の願を明らかにする。一心願生から観の眼を開いて、そして一心願生を成就していく。得たものを確認していく。願が成就して信になったら、願が変質するのではない。かえって信によって願を成就する。そういうようなかたちになるのです。何のためにどこから観が出てきたか、何のために観ずるのか。こういうことを明らかにしておかなくてはならない。

ここで一応全体が終わっているでしょう。それからその次に今度は不思議ということが出てくる。

かの世界を観ずるに辺際なし。究竟せること広大にして虚空のごとし。五には仏法不思議なり。

突然出てくるのですけれども、ここで一応終わっているのです。それから不思議ということを改めて展開しているのです。しかしその前に「観彼世界無辺際 究竟広大如虚空」とあります。『浄土大論』の清浄功德と量功德ですね。

清浄功德というのは、これは全体なのです。何故かというと、三種莊嚴功德成就の浄土と言う。三種莊嚴というのは、開けば三種莊嚴ですが、摂すれば二種清浄。二種清浄世間ということになります。これは世間ということです。世間というのは、これは我々の住んでいる世間ですね。それから信仰というものを入れると世界を超えるでしょう。

だから勝過三界というのです。しかし、世界を超えるというとは無世界になるのではないか。つまり涅槃というものはそうですね。人間の三界を超えたらそれは涅槃です。涅槃というものになると、これは無世界だと、こういうふうになるように思います。しかしそうではない。無世界になるといつても、そこに一つの新しい世界が生まれてくる。世界が消えてしまうのではない。かえってそこに新しい世間というものが開けてくる。世間が消えてしまうのではない。世間を寂滅しているのではない。もう一つ新しい世間というものがそこに生まれてくる。世界がなくなるのではなく、もう一つ新しい世間、新しい世界という意味を表しているのです。

世間というものは、これは平凡な言葉では世の中という言葉なのですけれども、仏教の言葉では、ローカ (loka) という。つまり環境という意味なのです。ドイツのこの前亡くなったハイデガーという人に「世界内存在」という言葉がある。「世界内存在」、大事な言葉ですね。ハイデガーの世界内存在、つまり実存主義とは何かということです。実存という意味は本質存在という意味ではない。本質存在というものから区別して、現実存在という意味です。もつと別の言葉でいえば、今ここにだけかとして在る、ということですが、「である」という意味ではなく、「がある」という意味です。「である」というのは本質です。「がある」というのが実存なのです。我々というのはそういうのです。「我々である」ということは仏性です。「我々がある」ということは、それは現実存在でしよう。本願でも、仏性でも、何でも、本質存在というようなのは、我々をこえたものだ。やはり「がある」ということに意味があるのですね。

仏様も、これもやはり人間の問題をもつて仏様を照らすのであって、本質としての仏様はただ「如」というものなのです。「如」が「来」となる。「来」というところに現実が生きている。「来」がなかったら、仏様というものも、現実というものに触れなかったならば、ただ「如」というだけであって、「如来」ではない。その意味で、仏様も現実の仏様にならなくてはならない。現実というのは人間が現実なのだ。それ以外に現実はない。「現実」とは、今、

ここに、誰かとして生きている、ということです。現実存在というものになるために本願というものがあるのです。

その現実存在ということであらわすのに、ハイデガーは「世界内存在」という言葉を使うのですけれども、これはちょっと翻訳の言葉ですから、これだけ言っても少し分かりにくいですね。翻訳だから仕方がないことですが、何か生きた言葉になってこないですね。「世界内存在」とは、もとの言葉はインデアヴェルトザイン (in der Welt sein) です。ザイン (sein) は存在です。現実存在です。我々というのは世界において在る者である。世界に離れて在る者ではない。世界というのは今ここだ。今、ここ、というかたちをもつて存在する。そういう現実存在というものを押さえてこなければ話にならない。そういうもので証明しなくてはならない。

曾我先生が、法蔵菩薩は阿頼耶識だということのもそのためなのです。今ここに在る自分と関係のないところで法蔵菩薩を証明しようとしても話になってしまいうでしょう。法蔵菩薩は話ではない。話でなければ実存でしょう。そういうことをこの「世界内存在」という言葉も言っているのです。それは仏教の言葉では世間というのです。

浄土というものが、ただ我々を超えてしまうというような場合は、これはさっき言った大涅槃である。そうするとその大涅槃というのは、さっき言った本質存在です。その大涅槃が、その覚った人だけ覚ったという意味の大涅槃ならば、それこそ『教行信証』の言う「自性唯心」に沈んだような覚りである。これはプラテーカブツダ (pratyeka-buddha) です。これは「縁覚」「独覚」とも訳すけれども、このもともとの意味は何かというと、菩提樹の下で釈尊が十二縁起というものを観じて覚りを開かれたということで「縁覚」と言う。それで「縁」という字がつくのです。世界は縁起したものだということであられたと。そういうことで言えば、覚ったといっても内容がはつきりしていないのはならない。世界は成ったものだということによって覚られた。

そういう話は面倒なのですけれども、世界を覚るというのはそういう意味なのです。世界は在るものではないし、ないものでもない。在るとか、ないとか、そういうふうに決められないものが世界。つまり成ったもの。これを縁起

ということです。決めるのは分別です。在るとか、ないとか、決めるのは分別。だから決めるような妄想を破って見てくると、本当の世界が見えてくるのです。我々の思っている世界は決めた世界なのだ。それがどうして破られるかというと、自己矛盾で破られる。他から破られるのではない。妄想は妄想自身で破れていく。妄想とは苦しいでしょう。苦しみが続くのが妄想である。それで破られていく。妄想が破られていくというのは、妄想でないものに目が覚まされる。そうすると、あるものでも、ないものでもない。成った世界だ。縁起によって成った世界だ。こういうもので分別でない世界に触れるのです。だから縁起ということを書いてそれを分別するというと、縁起でないことになるのです。縁起を分別するのではない。分別が縁起したもののなのです。逆になります。世界が縁起したものだ。縁起をまた聞いて分別したら話にならない。それを「迷う」というのです。縁起を聞いて分別したら、それを「迷う」という。それだからして分別が縁起したものが覚ったものなのです。そのような意味で縁覚ということを言うのです。

だから、「縁覚」とは、本来は言葉としては悪い意味ではないです。そのときはやはり一人です。一人というのは、これは英語で言うself, selvesですね。つまり「一人で」という意味です。一人で知ることです。この「覚」というのは「知る」ことです。教えられて知ることではない。一人で知ることです。そういうときに「覚」というのです。人に教えられて知ることではない。人に教えられて知るのを「声聞」というのです。人に教えられて知るのではなく、一人で知る。こういう意味で「独覚」というのです。教える師なくして覚ったと。「独覚」の「独」とは、無師独悟という意味なのです。そして覚った内容は「縁」です。だから縁覚とは、その縁を一人で覚ったという意味なのです。それで「独覚」というのです。

今日はそのような話に触れるわけにはいきませんが、私たちは一人で覚ったのではなく、一人で迷っているのではないかと、こうも言えますね。そうでしょう。釈尊一人覚ってあとはみんな迷っている。逆ではないかと。釈尊一人独悟しているのではないかと、こういうようにも言えるのではないでしょうか。しかし、九九九人が迷っていても私

一人が覚ったということが言えるためには、その一人が覚ったということを証明するものがなくてはならない。証明せずに決めているというのを、それを「自性唯心に沈む」というのです。自性唯心に沈んでしまう。証明するためにはもう一人仏が要るでしょう。仏を証明する仏が要るのです。証自証分というような、自証を証ずることが要る。そこに無数の仏が生まれてくる。三世十方の諸仏が生まれてくる。それが証明してくる。

そういう意味で、そのときに覚りとは一人ではない。全法界が覚る。だから、大乘經典になるというと、釈尊が成道しているときに我と山河大地が同時に成道したという。自分一人が成道したのではない。全法界が同時に成道したと言います。自分が覚った眼で見るというと法界が全部覚る。その覚った法界が自分の覚りを証明してくれる。こういうようなことなのです。それで大覚世尊というのです。一人の時ならばこれは阿羅漢になってしまふ。阿羅漢の覚りではないということを言わねばならない。だから世間を滅したら涅槃であり、涅槃は覚りですけれども、それは一人の涅槃ではない。一人の世界ではなく、全人類を包むような涅槃だと。そういうときにその涅槃は浄土になる。浄土であるような涅槃を大涅槃というのです。だから「大」という字をつけるのです。そういう意味で世間がないのではない。新しい世間が生まれるのですね。我々、人間の世界では、「人間の世界」は成り立たないのです。人間を破るところに、本願に触れるところに初めて人間の世界、すなわち世間が成り立つのです。人間では人間の世界は成り立たない。例えば人間の世界では親切ということがある。しかし人に親切にするというようなことは、人間の世界では成り立たないのです。人間の親切くらい不親切なものはないのです。本当の親切というものは浄土でなければ成り立たないのです。そういう意味で世間ということが出てくるのですね。今日は時間がないのでそこまでにしておきましょう。

（本稿は岐阜慈光会主催の『入出二門偈』の会における一九七六年六月四日午後の講義を筆録整理したものである。文責編集部）